桃のある風景

岡本かの子

食欲でもないし、情欲でもない。肉体的とも精神的とも分野をつき止めにくいあこがれが、低気圧の渦(うず)のように、自分の喉頭(のど)のうしろの辺(あたり)に鬱(うつ)して来て、しっきりなしに自分に渇(かわ)きを覚(おぼ)えさせた。私は娘で、東京端(はず)れの親の家の茶室(ちゃしつ)作りの中二階に住んでいた頃である。私は赤い帯を、こま結びにしたまま寝たり起きたりして、この不満が何処(どこ)から来たものか、どうしたら癒(いや)されるかと、うつらうつら持て扱っていた。

人が、もしこれを性の欲望に関する変態のものだったろうと言うなら、或(あるい)はそうかも知れないと答えよう。丁度(ちょうど)、年頃(としごろ)もその説を当嵌(あては)めるに妥当(だとう)である。しかし、

私はそう答えながら、ものごとを片付けるなら一番あとにして下さいと頼む。それほど私には、片付けられるまでの途中の肌質のこまかい悩ましさが懐かしく大事なのだから。

母は単純に病気だということに決めてしまって、私の変った症状に興味を持って介抱した。「お欠餅を焼いて、熱い香煎のお湯へ入れてあげるから、それを食べてご覧よ。きっと、そこへしこってる気持がほごれるよ。」「沈丁花の花の干したのをお風呂へ入れてあげるから入りなさい。そりゃいい匂いで気が散じるから。」母は話さなかったが、恐らく母が娘時代に罹った

気鬱症（きうつしょう）には、これ等（ら）が利（き）いたのであろう。

色、聞、香、味、触の五感覚の中で、母は意識しないが、特に嗅覚を中心に味覚と触覚に彼女の気鬱症は喘（あえ）ぎを持ったらしいことが、私に勧（すす）める食餌（しょくじ）の種類で判（わか）った。私もそれを好まぬことはなかった。しかし、一度にもっと渾然（こんぜん）として而（しか）も純粋で爽（さわや）かな充足を欲した。「もっと、とっぷりと浸（つ）かるような飲（のみ）ものはない？」「しとしとと、こう手で触（ふ）れるような音曲（おんぎょく）が聴（き）き度（た）いなあ。」母は遂々（とうとう）、匙（さじ）を投げた。「男持ちの蝙蝠傘（こうもりがさ）を出して下さい。」「草履（ぞうり）を出して下さい。」「河を渡って桃を見に行くから。」私は必ずしも、

男性に餓（う）えているというわけではなかった。渡しを渡った向岸（むこうぎし）の茶店（ちゃみせ）の傍（そば）にはこの頃毎日のように街の中心から私を尋（たず）ねて来る途中、画架（がか）を立てて少時（しばらく）、河岸（かし）の写生をしている画学生がいる。この美少年は不良を衒（てら）っているが根が都会っ子のお人好（ひとよ）しだった。

　私は彼を後に夫にするほどだから、かなり好いてはいた。けれども、自分のその当時の欲求に照（てら）して、彼は一部分の対象でしかないのが、彼に対して憐（あわ）れに気の毒であった。

　茶店の床几（しょうぎ）で鼠（ねず）色羽二重（はぶたえ）の襦袢（じゅばん）の襟（えり）をした粗（あら）い久留米絣（くるめがすり）の美少年の姿が、ちらりと動く。今日は彼は

茶店の卓で酒を呑(の)んでいるのだ。私は手を振って、尾(つ)いて来ちゃいけないと合図すると、彼は笑って素直に再び酒を呑み出した。私は堤(つつみ)を伝(つた)って川上の方へ歩いて行った。

長い堤には人がいなくて、川普請(かわぶしん)の蛇籠(じゃかご)を作る石だの竹だのが散らばっていた。私は寒いとも思わないのに岸に繋(つな)いである筏(いかだ)の傍には焚火(たきび)が煙(けむ)りを立てていた。すべてのものは濡(ぬ)れ色(いろ)をしていた。白い煙さえも液体に見えて立騰(たちのぼ)っていた。

川上の上は一面に銀灰色(ぎんかいしょく)の靄(もや)で閉じられて、その中から幅の広い水の流れがやや濁(にご)って馳(は)せ下っていた。

堤の崩(くず)れに板の段を補(おぎな)って、そこから桃畑に下りられるようになっている。私は、ここで見渡せる堤と丘陵(きゅうりょう)の間の平地一面と、丘陵の裾(すそ)三分の一ほどまで植え亙(わた)してある桃林(とうりん)が今を盛りに咲き揃(そろ)っている強烈な色彩にちょっと反感を持ちながら立ち止まった。だが、見つめていると、紅(あか)い一面の雲のような花の層に柔かい萌黄(もえぎ)いろの桃の木の葉が人懐(ひとなつ)かしく浸潤(にじ)み出ているのに気を取り做(な)されて、蝙蝠傘(こうもりがさ)をすぼめて桃林へ入って行った。

　思い切って桃花の中へ入ってしまえば、何もかも忘れた。一つの媚(こび)めいた青白くも亦(また)とき色の神秘が、着

物も皮膚も透して味覚に快い冷たさを与えた。その味覚を味う舌が身体中のどこに在るやら判らなかったけれど味えた。「伝十郎」とまるで人間の名のように呼ばれるこれ等の桃の名を憶い出して可笑しくなった。私は、あはあは声を立てて笑った。

冷たいものがしきりなしに顔に当る。私は関わずに、すぼめて逆さに立てた蝙蝠傘を支えにして、しゃがんで休む。傘の柄の両手の上に顎を安定させ、私は何かを静かに聴く。本能が、私をそうさせて何かを聴かせているらしい。桃林の在るところは、大体川砂の両岸に溢れた軽い地層である。雨で程よく湿度を帯びた砂

に私の草履(ぞうり)は裸足(はだし)を乗せてしなやかに沈んで行く。「すと」「すと」花にたまった雨の澪(しずく)の砂に滴(したた)る音を聴いていると夢まぼろしのように大きな美しい五感交融(こうゆう)の世界がクッションのように浮(うか)んで来て身辺(しんぺん)をとり囲む。私の心はそこに沈み込んでしばらくうとうととする。

こういう一種の恍惚感(こうこつかん)に浸(ひた)って私はまた、茶店(ちゃみせ)の美少年の前を手を振って通り、家の中二階へ戻る。私は自分が人と変(かわ)っているのにときどきは死に度(た)くなった。しかし、こういう身の中の持ちものを、せめて文章ででも仕末(しまつ)しないうちは死に切れないと思った。机の前

で、よよと楽しく泣き濡（ぬ）れた。

後年、伊太利（イタリア）フローレンスで「花のサンタマリア寺」を見た。あらゆる色彩の大理石を蒐（あつ）めて建てたこの寺院は、陽に当（あた）ると鉱物でありながら花の肌になる。寺でありながら花である。死にして生、そこに芳烈（ほうれつ）な匂（にお）いさえも感ぜられる。私は、心理の共感性作用を基調にするこの歴史上の芸術の証明により、自分の特異性に普遍性を見出（みいだ）して、ほぼ生きるに堪（た）えると心を決した。

――人は悩（なや）ましくとも芸術によって救われよう――

と。

底本：「愛よ、愛」メタローグ
1999（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
1976（昭和51）年発行
※「しっきりなし」「ほごれる」「喘（あえ）ぎ」「しきりなし」「滴（しずく）」「仕末（しまつ）」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2004年3月30日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。